

小谷村「7・11豪雨災害」シンポジウム(7月12日) 採録

パネリストのセッションでは、実行委員長で信州大学の平松晋也教授をコーディネーターに、当時姫川砂防事務所職員だった松本小谷村長、中谷開発委員会の太田武彦代表、小谷村初の女性消防団員となった深澤和子さん、白馬村在住で小谷小学校教諭の横川伊佐子さんの4人が語った。過去を教訓に未来の地域の防災に向けて話し合った議論をダイジェストで採録する(文中敬称略)。

平松 小谷村も少子高齢化と人口減少が進んでいる。20年前の災害と社会状況が大きく変わっている。当時の状況を振り返り、将来の地域の強靱化に向けての始めの一歩となれば、まず松本村長、現在変わった状況は、松本 土砂災害警戒区域などが明示され、危険な範囲がわかるようになった。災害情報の精度はまた課題があるが、避難指示発令の判断がしやすくなっている。20年が過ぎ、人口は4307人↓3056人、消防団員数3

37人↓27人人と減少。高齢化は進み、65歳以上が25%から37%となった。村だけではすべて対応できない。消防団や自主防災組織に頼らざるを得ない。平松 人口が30%減っている現状を認識すべき。消防団員がいなくなればいざというときに動く人がいなくなる。自主防災組織を立ち上げた太田さん。太田 当時は中土郵便局に勤務。中谷川もものすごい状況だった。国県村のおかげで

深澤さん、お話を。深澤 当時、主人と4世帯9人の大家族で暮らして、「鉄砲水が来る」と天騒ぎし避難し

来、地域にもあの災害を乗り越えたという自信が現れたが、7・8年前から高齢化が進み、自主防災組織の必要性が言われるようになった。気づきの原点が7・11災害だった。昨年の神城断層地震

でも組織的な避難ができ、安全確認も2、30分で終了した。避難所の運営には課題もあった。関係機関や避難者同士の情報の共有こそ、安心して災害を乗り切れることだと思

改善はやはり重要。地域の絆の重さも伝わった。横川さん、小学校の先生として感じていることは、横川 豪雨災害を風化させないために、語り継ぐことが大切。聞いてみる

と、2年生約8割が良く知らなかった。教員も子どもたちも災害を知らない。どんな災害だったか、その時の気持ちを、子どもや孫に話してあげてほしい。学校・家庭・地域・行政が連携し、誰かに頼るでなく、自分たちが

ができることを探りながら防災意識が向上できれば。平松 防災の担い手はやはり子どもたち。防災教育がかなり重要。家庭の中で子どもと話し合い、地域に伝



コーディネーターの平松教授

防災教育 小谷から発信へ

死者がなかったこと。日頃から強い絆で結ばれた地域のつながりのたまもの。10年して消防団に入りました。小学校の避難訓練で、子どもたちが7月のことを知らないことに気付きました。紙芝居をつくり防災の大切さを伝えていきます。技術が進んでも自然の脅威にはかなわない。でも私たちは20年前の教訓をいかし、よりよく復興していく事ができると思っています。

7・11梅雨前線豪雨災害 平成7年7月11日から12日にかけて、県北部に例年7月の約1か月分に相当する最大時間雨量48㎜、連続雨量389㎜の集中的な豪雨がもたらされた。道路の寸断により多数の集落が孤立。被害は住宅28棟が



パネリストのみなさん(左から太田氏、深澤氏、横川氏、松本氏)

「7・11災害」語り継ぐ

小谷村 20年の節目にシンポ



災害の記憶を振り返ったシンポジウム

大系ダイア

白馬・小谷版

大北西部の姫川流域を襲った平成7年の「7・11豪雨災害」から20年の節目を迎え、小谷村の小谷小学校で12日、シンポジウムが開かれた（採録5面に）。繰り返される土砂災害

に備え、災害の記憶を次世代に語り継ぎ、地域の防災力を高める教訓とした。

住民3人が体験談で当時の様子を振り返った。姫川温泉に住んでいた今井杏さん（25）は当時4歳。保育園から早めに連れて帰られた自宅から、大網に避難した。すでに家の中まで浸水し始め、消防団員の「あぶない、危険、早く逃げろ」の声だけが耳に残った。避難生活の中で誕生日を迎えたが、家は姫川に流され、緑色の屋根と骨組みだけが残った。遊んでいたおもちゃや人形もすべてなくなった。父親は建設業で不眠不休の災害対応に追われ、帰ってきたのは9日後。姉と妹と、みんな泣き合ったという。「今でも雨の多い日は不安になる。地域の助け合いがあったから、今こうし元気になれる」と、涙をにじませながら訴えた。

村民や行政関係者ら約260人が参加。松本久志村長は「災害は全国どこでもあり得ること。防災の貴重な体験を、次の世代に引き継ぐ必要がある」とあいさつした。